

## 人間環境学部

## I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2020年度大学評価結果総評】(参考)

人間環境学部は、法政大学長期構想「HOSEI2030」が掲げる1つのミッションである「持続可能な地球社会の構築」を推進する一翼を担うという自覚から、目指すべき方向性を打ち出した上で学部長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」(2017年3月22日)を策定しており、学部の理念・目的は明確であり、学部の発展が大いに期待される。

内部質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携における2019年度目標の達成度はすべて良好であり、適切に運営されている。特に学習支援と学生の受け入については、社会人RSPや英語学位プログラム(SCOPE)を含め、多様な学生の確保、ニーズへの対応など、多様性をもつ入試経路を活かす取り組みが継続されており、高く評価できる。また、教育課程・学習成果における教育方法において、多様な専門領域からなる複数の教員が担当する科目を設け、学際的な協働を実践していることは人間環境学部独自の特色が大きく生かされており、評価できる。

今後は、学部の特色に沿った学習成果を把握する新たな指標の開発に着手するとともに、適切な役割分担と情報共有に努めた上で、新型コロナウイルス対応に特化した今年度の全般的計画が適切に実行されることを期待する。

## 【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020年度は、新型コロナウイルス感染症流行拡大への対応のため十分な活動ができなかった憾みがあるが、そのなかで長期構想「人間環境学部 2030～for our sustainable future」および中期目標を達成すべくさまざまな新しい試みがおこなわれた。2021年度は、ウイルス流行の状況を注視しつつ、昨年度の実験的なアイデアを継続しさらに改善していく。

学部の特徴である教員間の協働による学際的な教育体系は、コロナウイルス流行下においてもさらに拡大され、「人間環境セミナー」や「フィールドスタディ」など複数教員が担当する授業を更に増加させた。

2019年度に少額広報予算を利用して着手した、高校生・高校教員向けの高大接続教育貢献の試み「SDGs出張授業」企画(および学内での関連セミナー)は、学部の理念の強化、組織的なFD活動、社会貢献と多くの機能を持つものであり、2020年度はコロナウイルス流行のため学外での活動が制約されるなかでも授業内容をオンライン化・オンデマンド化することで続行した。

社会人(RSP=リフレッシュステージプログラム)やSCOPE(英語学位コース)といった、比較的小規模の学部としては際だった多様性をもつ入試経路を有しており、さまざまな背景を持つ学生を受け入れている。これまでの経験や将来の志望、大学での学びにおける関心の所在などが大きく異なる学生のニーズに応え、学習成果の向上と大学への満足度の増大をはかるべく、今後はとくに学習支援体制の充実に重点を置いて改善と拡大をはかっていく。

さらに、コロナウイルスへの対応をおこないつつ、これら長期構想のリーディングプロジェクトに基づく施策を実現していくにあたっては、執行部や特定の教員の負担が過大にならないよう、学部内の限られたマンパワーを持続可能な形で活用していくことが喫緊の課題である。これに対しては、昨年度から設置された「ディーセントワークプロジェクト」を学部内のタスクフォースの形に拡大して取り組んでいく。

さらに、中期計画として、学部の特色に沿った「学習成果」把握のためのパフォーマンス評価については、その指標策定とあわせて具体的なツールの開発に関して、ループリックをはじめチェックシート、アンケートなどさまざまな可能性を引き続き検討する。

## 【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

人間環境学部では、実習系の科目を重視するという学部教育の特性から、2020年度は新型コロナウイルスの影響を特に強く教育面で受け、対面での実習教育に工夫が必要とされた年度であった。そうした中で、学際的な教育体系の拡大、高大接続教育貢献の試みとしてのSDGs出張授業のオンライン・オンデマンド化による続行など、学部長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」の実現に向けて新しい試みを次々と実施している点は評価できる。

一方、マンパワーの持続可能な活用としてのディーセントワークプロジェクトの拡大や、パフォーマンス評価のような学部特性を活かした「学修成果」把握のツールの開発の検討が今後も続けられることを期待したい。また2020年度の中期目標にあったホームページの改善に関しても、特に実際のキャンパス訪問ができない現状を考えれば、検討の継続が必要と思われる。

## II 自己点検・評価

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

## 1 教育課程・学習成果

## 【2021年5月時点の点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S A B
<p>※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。</p> <p>学部の専門科目をカリキュラムポリシーに基づき体系化することで、段階的な能力育成が可能な環境を整えている。その際のコンセプトは、学際性、社会との交流・連携、グローバル化への対応、社会人の学び直しの機会提供、の4つである。</p> <p>まず、「学際性」のコンセプトは、5つからなるコース制に反映されている。これについては後述する。</p> <p>次に、「社会との交流・連携」のコンセプトは、「フィールドスタディ」(FS)と「人間環境セミナー」によって代表されているが、それに加えてPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく「キャリアチャレンジ」(CC)を2017年度から開講した。これら3科目は2014年度入学生から選択必修科目(合計6単位以上修得)とし、学部生全員に対して学部の特徴的な学びを促すことを制度化している。この「フィールドスタディ」と「キャリアチャレンジ」は、学外での学びが中心となるため2020年度はコロナウィルス流行の影響を受けたが、それにもかかわらず年度後半には一部内容を変更したうえで「ウィズ・コロナのFS/CC」として開講を継続した。</p> <p>さらに、グローバル化に対応する能力を涵養するためのカリキュラムとしては、「Study Abroad (SA)」プログラムを2016年度から設置している。これと「海外フィールドスタディ」とあわせ、グローバル教育センターが提供する語学研修や各種の派遣留学制度と組み合わせることで、数週間程度の短期から1年間におよぶさまざまな海外留学を可能としている。そのほか、一般学生と英語学位プログラム(SCOPE)所属学生との共創の場として、2018年度から「Co-Creative Workshop」を設置し、英語でのアクティブラーニングの機会を設けている。</p> <p>加えて、2019年度から社会人学生を対象とした「リフレッシュ・ステージ・プログラム」(RSP)を開設した。このRSPに対しては2020年度には14名の、2021年度には13名の入学者があり(編入生を含む)、目的意識と学習意欲の高い社会人学生が集まってきている。RSPの授業のほとんどは一般学生用の既存のカリキュラムを共用するため、社会人学生と一般学生が交流し刺激を与え合うことができるように配慮している。その一方で履修のフレームワークは、豊富な人生経験を持つ社会人学生のニーズにあわせて柔軟に組み立てられる、自由度の高いものになっている。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「ウィズ・コロナのFS/CC」の企画と開講</li> <li>「リフレッシュ・ステージ・プログラム」(RSP)の運用</li> </ul>	
<p>【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度人間環境学部『履修の手引き』(web)</li> <li>学部ホームページ「独自の科目・セミナー」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/</a></li> <li>学部ホームページ「2020年度フィールドスタディ募集について(ウィズ・コロナのFS)」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSboshu/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSboshu/</a></li> <li>学部ホームページ「SCOPE」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/scope/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/scope/</a></li> <li>学部ホームページ「社会人リフレッシュ・ステージ・プログラム(RSP)」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/program/rsp/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/program/rsp/</a></li> </ul>	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S A B
<p>※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修(個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ(必修・選択等)含む)への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。</p> <p>カリキュラムは、教養科目(ILAC科目)と学部専門科目に大別され、後者はさらにリテラシー科目と展開科目に別れている。展開科目はさらに基盤科目と政策科目によって構成される。これらの科目群は、科目ごとのナンバリングやカリキュラムツリー/カリキュラムマップにより、カリキュラム全体の順次性・体系性を可視化しているほか、科目ごとに必修もしくは選択必修等の位置付けがなされている。</p> <p>学部専門科目のカリキュラムにおいては、コース制がその中核をなしている。コースの趣旨及び教育目標をより明確なものにするため、2015年度にその編成について検討を行い、コース名を変更した(サステナブル経済・経営コース、ロ</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

一カル・サステナビリティコース、グローバル・サステナビリティコース、人間文化コース、環境サイエンスコース)。2016 年度入学者から全学生が 2 年次進級時にいずれかのコースに所属することになっている。コースごとの専門的な学びを深めるコースコア科目 (10 科目 20 単位) のほか、コースを横断した学際的な学習を可能とするコース共通科目 (5 科目 10 単位) を設けているが、これらは必修科目ではなく、学生が各自の関心に応じて自由に学びを展開し深めていけるように選択必修としている。

学部専門科目のもうひとつの重点が、社会との交流や連携によっておこなわれる科目である。選択必修科目である「人間環境セミナー」は従来土曜日に開講していたが、選択必修化と多様な学生ニーズに対応するために、2016 年度以降は平日夜間にも開講している。2020 年度はコロナウィルスの影響で同じく選択必修の「フィールドスタディ」と「キャリアチャレンジ」の開講数が減少したため、秋学期には「人間環境セミナー」をさらに増加して計 3 コマ開講した。

本学部の社会人向けの「リフレッシュ・ステージ・プログラム」(RSP) は、前項にも記したように、上記の一般学生とは異なる履修制度をもつものとして 2019 年度にスタートした。卒業所要単位 124 以上 (一般学生は 130 以上)、うち ILAC 科目 36 単位以上 (一般学生 40 以上) としたほか、コース制の選択は不要とし、その代わりに学際的な履修計画の道しるべとして参考にしてもらうこととするなど、学生の主体的な選択が可能で、自由度の高いカリキュラム提供を実現している。

**【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ 人間環境セミナーの追加開講

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 2020 年度人間環境学部『履修の手引き』(web)
- ・ 学部ホームページ「カリキュラム」、「コース紹介」「独自の科目・セミナー」「2020 年度 春学期・秋学期 人間環境セミナー」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/e-system/>  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/>  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/>  
[https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/jinkanseminar/2020\\_seminar/](https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/jinkanseminar/2020_seminar/)

③幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S  A B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

本学部は、教育上のミッションとして「学際的かつ総合的な ESD (Education for Sustainable Development = 持続可能な発展のための教育)」を掲げており、そのなかで「持続可能性」についての学びと並んで、幅広い視野と、知性と感性が結びついた教養とともに、1 つの専門性を有する T 字型人材、あるいはメインとサブの複数の専門性を有する U 字型人材を育成することを重視している。「持続可能性」について学ぶためには、ひとつの専門に留まらない学際的なアプローチが必要不可欠である。そのため、学生が自分で「軸」を選択 (2 年次からのコース選択、ゼミ選択による専門性) したうえで、それを中心に各科目の学びを有機的に結びつけ、幅広い知識と総合的な判断力を涵養できるようにすることが教育課程の編成の基本である。ILAC 科目と専門科目のリテラシー科目を基礎とし、政策科目によって深めていくというカリキュラム編成をとっているのはそのためである。

レギュラーの講義科目に加えて、変化する時代や環境に応じたトピックスを時限的に柔軟に扱えるように、「人間環境特論」という科目も設け活用している (2020 年度は 5 科目開講)。

さらに、教室における机上の学習にとどまらず、実社会における、多様な人々との「協働」の能力を実践的に涵養する機会として、社会の現場における実習科目「フィールドスタディ」(国内・海外) や、社会の窓口たる「人間環境セミナー」、インターンシップ型の「キャリアチャレンジ」などの社会連携科目を設けている。

加えて、RSP や SCOPE の科目群も、プログラム学生だけではなく一般学生も受講が可能であり、専門分野にとらわれない、さまざまな視点からの学びを可能にしている。

**【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ 特になし

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 2020 年度人間環境学部『履修の手引き』(web)
- ・ 学部ホームページ「人間環境学部とは」、「人間環境学部の教育理念・目的」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/concept/>  
[https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/rinen\\_1/](https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/rinen_1/)

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S A B
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <p>初年度教育は二つの柱からなっている。一つ目としては、春学期設置の必修科目としての「人間環境学への招待」で、これは新入生が人間環境学部での学修を方向づけ、人間環境学のアプローチの多様性に触れることを主たる目標とする。二つ目には、秋学期に設置されている少人数制/担任制の必修科目「基礎演習」である。ここでは、種々のリテラシー教育のほか、学生としての勉学/生活の進め方の指導を行っている。このほか、1年次の夏休みから「フィールドスタディ」を履修できるようにし、PBLを初年次教育から採り入れている。以上により、年度を通じて継続した初年次教育を構築している。</p> <p>2020年度は、新型コロナウイルス感染の拡大を受けて春学期の授業期間が短縮されたため、「人間環境学への招待」の内容を整理・凝縮することを迫られたが、その一方でオンラインを用いることで「基礎演習」を通常より早く春学期のうちに開始することが可能となり、「プレクラスルーム」として7月中旬に2回開催することができた。さらに秋学期には「基礎演習」のクラスが対面で集まる「ホームカミングデイ」を開催し、コロナ下でお互い直接知り合う機会のなかった1年生が交流する機会を学期中2回程度確保した。</p> <p>高大接続への配慮としては、例えば理科系分野のリメディアルの要素も兼ね備えた科目として、「サイエンスカフェ」が設置されている。</p> <p>また、少額広報予算を利用した高校生・高校教員向けの「SDGs出張授業」企画を2019年度に着手した。その内容は学部の専門科目の授業を踏まえたものであり、高校時代において持続可能な社会に関わる問題意識涵養の契機を提供し、大学に進学後より学際的・専門的な学びに接続するという高大接続教育の性格も合わせ持っている。2019年度は計8回、2020年度もコロナ下にもかかわらずオンライン・オンデマンド方式で計15回の授業を実施した。オンライン化したことで遠隔地の学校への対応も可能になったことなどを受けて、引き続き取り組んでいく予定である。</p> <p>なお、社会人学生への初年度教育については、社会人学生専用の「基礎演習」クラスを2015年度から設置している。2019年度から開設した社会人学生のための「リフレッシュ・ステージ・プログラム」(RSP)では、上記「人間環境学への招待」・「基礎演習」は必修とはせず選択科目と位置づけ、前籍校でほぼ同一の内容を既習している場合は履修を免除しているが、その場合でも同プログラムの入学者はとくに前者をすすんで履修する傾向にある。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「基礎演習」におけるプレクラスルーム・ホームカミングデイの開催。</li> <li>「SDGs出張授業」のオンライン・オンデマンド化</li> </ul>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度人間環境学部『履修の手引き』(web)</li> <li>「基礎演習プレクラスルームによる1年生ケアについて」(2020年度第3回教授会資料、2020年6月17日)</li> <li>「学部生の登校機会(仮称「ホームカミングデイ」)企画について」(2020年度第5回教授会資料、2020年9月16日)</li> <li>「2020年度広報活動の実施状況」(2020年度第12回教授会資料、2021年2月17日)</li> </ul>	
⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。	S A B
<p>※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>「グローバル教育推進」は、学部の長期構想「人間環境学部2030」においてもリーディングプロジェクトの一つに挙げられている。カリキュラムにおいては、グローバル・サステナビリティコースを設置して、学生の国際性を涵養するための教育課程/科目群をより明確にしている。なおコース制においては、自らが所属しないコースの科目も履修可能であり、国際性を涵養する科目はすべての学生に開かれている。SGUに伴い全学で設置されたグローバルオープン科目も、自由科目の枠内で(卒業所要単位として)受講が可能である。</p> <p>他には、①「海外フィールドスタディ」、②SAプログラムがある。①は年間3、4コース設置し、学生が国際性を涵養する機会を提供しているが、随時、海外事情の変化に対して学生の安全に留意し、コースの見直しを行っている。また多くの学生に参加機会を提供するため、海外フィールドスタディ奨励金制度を設け、学生に対する参加費の補助を行っている。②は2016年度に新設された短期海外留学機会の提供である。これについても奨学金による補助を行っており、広く学生に参加を呼びかける体制を整え、2017年度秋学期から実際の派遣を開始している。</p> <p>語学教育では、専門科目内のリテラシー科目として、「アクティブ語学(英語)」と「テーマ別英語」を開講している。「アクティブ語学」では、初級会話・中級会話・上級会話・ビジネス会話と、レベル別および目的別に授業を展開し、学生の発信型英語コミュニケーション能力の向上に寄与している。「テーマ別英語」では、学部の専門分野と関わりが深いテーマを英語で講義・ディスカッションを行なうなど、学問的内容の学習と語学力の涵養を同時に目指す融合型アプロー</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

チを実践している。

2016年度秋学期から開設された英語学位プログラム Sustainability Co-creation Programme (SCOPE) は、本学の SGU の重要な部分を担う事業であり、入学者アンケートでも高い評価を受けている。ニーズに対応するため、2021年度入試から入学定員を10名増加し20名とし、合わせて2種類の入試方式を導入し多様な学生の受け入れを図っている。この SCOPE に設置された、「Co-Creative Workshop」において、留学生とともに英語でアクティブラーニングに取り組む機会が提供されていることは特筆に値する。さらに、SCOPE 科目は ESOP 生にも随時受講されており、各種の英語学位プログラムと並んで本大学における SCOPE の存在意義はきわめて大きい。

2020年度は新規に「Environmental Science」を開講するとともに、卒業論文 (Thesis) の運用を開始し、カリキュラムの充実をはかった。さらに、制度上整備されていた早期卒業制度を利用した卒業生が誕生し、多様な学生のニーズへの対応を実現している。

以上のようなグローバル教育の体系を示す「グローバルツリー (カリキュラムツリー) の作成について、2019年度に検討に着手した。

**【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ SCOPE 定員の増加
- ・ SCOPE 早期卒業制度を利用した早期卒業生の輩出

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 2020年度人間環境学部『履修の手引き』(web)
- ・ 学部ホームページ「SCOPE」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/gakka/scope/>
- ・ 英語学位プログラム「SCOPE」ウェブサイト  
<https://scope.hosei.ac.jp/>
- ・ 「The Sustainability Co-creation Programme, Application Guidelines for Period I」  
<http://exam.52school.com/guide/hosei-ebdp/guidebook/>

⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S  A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

キャリア教育に関しては、ILAC 科目ゼロ群に置かれた全学共通の公開科目である「キャリア教育プログラム」科目の利用のほか、学部独自の提供として以下の内容を挙げることができる。

本学部は基本理念の一つに「社会との交流・連携」を掲げており、現地実習プログラム「フィールドスタディ」(FS) や、社会の窓口といえる「人間環境セミナー」は、選択必修科目として学部の代表的な看板科目となっている。これらは、おのずと社会人基礎力修養の場となる。2017年度からはPBLをより深く実践的に経験する場として、受け入れ団体との提携に基づく、インターンシップ型の「キャリアチャレンジ」(CC)を開講した。このほか、上記ILAC科目のキャリア教育科目とは別に、学部専門科目で英語による「キャリア入門」という授業も開設している。

また、2年次から多くの学生が参加する「研究会」(ゼミ)の中には、交流のある地域を訪問して体験・実践活動をする合宿を催行するゼミや、実地調査や訪問により企業研究を行うゼミ、自治体との連携活動「千代田エコシステム」(CES)への貢献を内容とするゼミ、「自治体職員をめざすための研究会」と称するゼミなど、社会連携・貢献の性格が強いものが少なくない。

このように、学部の理念とカリキュラム体系の特性を活用した総合的なキャリア教育の実施を進めている。

さらに、学部主催による就活セミナーを11月7日に開催したほか、同窓会の協力を得て卒業生及び就活を終えた4年生が自らの経験を後輩学生に伝えるイベント「自主就活セミナー」を2019年度に続いてオンライン方式で開催(12月12日)し、社会での実務経験や就活で得たノウハウを共有することを通して、キャリア教育の推進をはかる試みを実施した。

**【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ 「就活セミナー」、「自主就活セミナー」の実施

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 学部ホームページ「人間環境学部のキャリア教育」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/career/shushoku/>
- ・ 「人間環境学部就活セミナー実施案」(2020年度第6回教授会資料、2020年10月14日)
- ・ 学部ホームページ「人間環境学部 第3回 自主就活セミナー 卒業生が語る “コロナ” でどうだったの?」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/togopage/3syukatu/>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 人間環境倶楽部（学部同窓会）ホームページ  
<https://hosei-jinkan-club.jp/>

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

**【履修指導の体制及び方法】** ※箇条書きで記入。

- 1 年次教育では、入学時のオリエンテーション・ガイダンスに加えて、必修科目である「人間環境学への招待」（春学期）及び「基礎演習」（秋学期）を通じて、全員に導入的な履修指導を実施している。
- 「人間環境学への招待」では、授業構成がコース制（2 年次～）のイントロダクションになるように計画されており、コース毎に担当教員を配置している。
- 「研究会」（ゼミ、2 年次～）や「フィールドスタディ」（FS, 1 年次から履修可）、「キャリアチャレンジ」については、募集の時期に説明会やガイダンスを実施し、学生の履修意欲の向上に努めている。特に「研究会」は、募集の時期となる秋学期に、それにあわせて「基礎演習」での概要説明やガイダンスを行い、コース制との有機的なつながりに力点を置いた履修指導を実施している。2020 年度には担当教員が研究会の概要について説明する動画やファイルを作成し、説明会に代えた。
- 学部教員が共同で執筆した『フィールドから考える地域環境』を新入生全員に配布し、教員やその授業やゼミの内容について知識を得るきっかけを提供しているほか、「人間環境学への招待」や「基礎演習」の教材としても活用されている。同書は 2020 年度には第 2 版を刊行し、2020 年度新入生および卒業生に配布した。
- このほか、学年を通じた指導体制として、各教員のオフィスアワーを設け、学生個々の履修相談にいつでも応じられる体制をとっている。
- 留学生および社会人学生の新生（編入学含む）に対しては、2015 年度に履修指導体制を再検討し、入学時にガイダンスを実施している。
- 2020 年度より、春学期始めにその年度すべての授業科目の履修登録をおこなえるようにすることで、1 年間を通じた履修計画の立案を促す取り組みを開始した。

**【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- 教員のゼミ紹介動画の作成と公開
- 『フィールドから考える地域環境』（第 2 版）の刊行

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- 学部ホームページ「新入生ガイダンス動画」  
[https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/zaigakusei/class\\_information/2021class\\_information/#doug](https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/zaigakusei/class_information/2021class_information/#doug)
- 学部ホームページ「ゼミ紹介」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/>
- 学部ホームページ「2021 年度研究会募集について」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/2021bosyu/>
- ミネルヴァ書房ホームページ『フィールドから考える地域環境』（第 2 版）  
<https://www.minervashobo.co.jp/book/b548723.html>
- 学部ホームページ「オフィスアワー」  
[https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/zaigakusei/class\\_information/2021class\\_information/#other](https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/zaigakusei/class_information/2021class_information/#other)

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

カリキュラムとしては、初年次教育の「人間環境学への招待」（春学期必修）において、大学教育における講義の受け方やレポートの書き方などを講義している。なお、同科目が学部のカリキュラムのコアとなる「コース制」の導入教育にあたる内容を具えていることは、前項に記した通りである。

初年次秋学期における必修科目「基礎演習」では、基本的なリテラシーに加えて、学生自らが学習する態度を身につけるノウハウを教授し、少人数教育を経験させ、本学部の学習指導上、重要な位置づけにある「研究会」での学びの基礎を習得させている。

専任教員は最低 1 つの「研究会 A」（2～4 年までが継続参加する少人数教育）を担当し、卒業論文にあたる「研究会修了論文」の指導を行っている。なお、ゼミに所属しない学生に対して、卒業論文に相当する「コース修了論文」を執筆できる制度を 2016 年度より導入した。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>個別指導体制としては、オフィスアワーの時間を中心として、履修やカリキュラムに関する質問等、学習の方法に関する学生の質問に応じる体制がある。</p> <p>また、学習指導委員会を設置し、学生の求めに応じて教員が助言する体制も備え随時実施している。成績不振者に対しては全員に面談の連絡を行い、2019年度は14名、2020年度は23名に対して個別面談を実施するなど、履修/学習上の問題解決に取り組んでいる。</p> <p>RSPをはじめとする社会人入学者に対しては、入学時に単位認定をおこなう際に、個別に面談し、履修と学修に関する面談を実施している。さらに社会人コンシェルジュを設置しているほか、ラーニング・サポーター制度を活用して、在学生が履修に関するアドバイスを行う場を設けている。2020年度は7名を採用し、「社会人学生のつどひ」として年度初めの4月に活動をおこなった。またRSP専用の「研究会B」を設けて参加を奨励し、個別の履修指導・助言を行う機会としている。</p>		
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・ 特になし</p>		
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・ 2020年度人間環境学部『履修の手引き』(web)</p> <p>・ 2020年度人間環境学部『シラバス』(web)</p> <p>・ 学部ホームページ「オフィスアワー」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/zaigakusei/class_information/2021class_information/#other">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/zaigakusei/class_information/2021class_information/#other</a></p> <p>・ 「成績不振学生に対する学習指導について」(2020年度第8回教授会資料、2020年12月11日)</p> <p>・ 「2020年度ラーニング・サポーター申請書兼実施報告書」(人間環境学部、2020年5月14日)</p>		
③学生の学習時間(予習・復習)を確保するための方策を行なっていますか。	S	A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>すべての授業において授業外で行うべき学習活動(準備学習等)が指示されており、その内容はシラバスによって周知されている。</p> <p>少人数教育である「研究会」では、学生が予習・復習を行って来ることが前提となっている。「研究会」の中には、さらに学習時間を確保するためサブゼミを開設し、担当教員が適宜、指導をしているものも多い。</p> <p>社会連携のための科目である「フィールドスタディ」(FS)では、現地訪問に先立って授業時間数回分の事前学習の時間が設けられることになっており、さらに実施後の事後学習とレポート執筆がセットになっている。2020年度に実施した「ウィズ・コロナのFS」では事前・事後学習がそれまで以上に重視されている。</p>		
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・ 「ウィズ・コロナのFS」の実施</p>		
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・ 2020年度人間環境学部『シラバス』(web)</p> <p>・ 学部ホームページ「ゼミ紹介」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/</a></p> <p>・ 学部ホームページ「フィールドスタディ」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/</a></p> <p>・ 学部ホームページ「2020年度フィールドスタディ募集について(ウィズ・コロナのFS)」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSboshu/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSboshu/</a></p>		
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S	A B
<p><b>【具体的な科目名及び授業形態・内容等】</b> ※箇条書きで記入(取組例:PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等)。</p> <p>・ 「フィールドスタディ」(FS)はPBLを実践する授業である。学部設立時から学部の特色ある科目として、重点的に取り組んでいる。</p> <p>・ 「研究会」においても、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によって、アクティブラーニングが実践されている。上記FSに準ずる地域の現場体験・実践の内容をもつゼミ合宿や企業訪問・調査活動を行っている研究会も少なくない。</p> <p>・ FSの発展プログラムであるインターンシップ型の「キャリアチャレンジ」においては、より深く実社会でのPBLに参画する機会が提供されている。</p> <p>・ 「スタディアブロード」(SA)プログラムにおいては、短期集中型の語学教育/異文化理解教育を実践している。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>SCOPE 科目「Co-Creative Workshop」においては、一般学生が文化を異にする留学生と、英語を通じたアクティブラーニングを実践する機会が提供されている。</li> </ul>	
<p><b>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>特になし</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>2020 年度人間環境学部『履修の手引き』(web)</li> <li>学部ホームページ「独自の科目・セミナー」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/</a></li> </ul>	
<p>⑤それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p>	
<p>現在のところ授業に支障をきたすほど過度に参加学生数の多い授業は存在していないが、「研究会」「フィールドスタディ」「キャリアチャレンジ」など PBL やアクティブラーニングを実施する授業においては、定員を設け、学生の授業への積極的な参加を確保しつつより深い学びへと誘導する配慮を行っている。</p> <p>初年次秋学期の必修科目である「基礎演習」においては、学生のコース所属の希望を基に、1 クラスが 15～18 名となるよう振り分けて少人数授業を実現している。2020 年度においては、ILAC 科目の必修諸外国語クラスをベースとしてクラス編成をおこなった。</p> <p>参加学生数が授業の内容に影響を与えることが多いのは語学の授業であるが、1 年次の英語必修クラスにおいては授業規準人数を 24 名とし、授業環境の確保に配慮している。スキルアップ科目の語学授業についても定員を設け、学生の積極的な授業参加機会を確保し、語学能力の向上に適した環境の整備をはかっている。</p>	
<p><b>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>必修語学授業をベースにした「基礎演習」クラス編成の導入</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>学部ホームページ「基礎演習」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/e-system/kiso/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/e-system/kiso/</a></li> <li>「1 年生を対象とした少人数クラス『プレクラスルーム』実施へのご協力のお願ひ」(2020 年度第 3 回教授会資料、2020 年 6 月 17 日)</li> </ul>	
<p>⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。</p>	
<p>※取り組みの概要を記入。</p>	
<p>2020 年度は、新型コロナウイルス感染症流行への対応について学部内の総合調整をおこなうため、学部長を本部長とする「危機管理本部」を 4 月 1 日に立ち上げた。同本部を中心にして、コロナ流行下の学部の教育活動に関して以下の対応・対策をおこなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学部の BCP 規定、授業方針、ガイドラインの策定。</li> <li>「フィールドスタディ」(FS)・「キャリアチャレンジ」(CC) は I 期(春学期)は中止、II 期(秋学期)は「ウィズ・コロナの FS/CC」として規模を縮小して実施。</li> <li>「人間環境セミナー」の臨時コマ増(FS を中止したコマを流用)。</li> <li>「基礎演習」(秋学期開講)の一部内容を「プレクラスルーム」として春学期終盤に実施。</li> <li>「基礎演習」と「研究会」における「ホームカミングデイ」の実施。学生相互および教員とのコミュニケーションをはかるため、授業外の任意参加として対面でおこなう。</li> <li>成績評価については、授業担当者の罹患に備え、レポート内容の危機管理本部への預託制度を実施。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>「危機管理本部報告」(2020 年度第 1～9 回教授会資料)</li> <li>学部ホームページ「2020 年度フィールドスタディ募集について(ウィズ・コロナの FS)」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSBoshu/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSBoshu/</a></li> <li>「1 年生を対象とした少人数クラス『プレクラスルーム』実施へのご協力のお願ひ」(2020 年度第 3 回教授会資料、2020 年 6 月 17 日)</li> <li>「学部生の登校機会(仮称『ホームカミングデイ』)企画について」(2020 年度第 5 回教授会資料、2020 年 9 月 16 日)</li> </ul>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・ 「教員の緊急事態発生時のレポート預託と成績評価について」(2020年度第2回教授会資料、2020年5月13日)	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【 <b>確認体制及び方法</b> 】※簡条書きで記入。	
・ 成績評価は基本的に担当教員の裁量事項であるが、SからD、Eまでの評価割合は学部執行部として把握している。とくにSの割合については、大学の基準を周知している。	
【 <b>2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等</b> 】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
・ 特になし	
【 <b>根拠資料</b> 】※ない場合は「特になし」と記入。	
・ 特になし	
②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	
・ 学部別に集計されたGPCAと全学のGPCAを教授会構成員に周知している。	
・ 試験における不正行為を防止するために、定期試験における参照物についての申し合わせ事項を策定している。	
【 <b>2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等</b> 】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
・ 特になし	
【 <b>根拠資料</b> 】※ない場合は「特になし」と記入。	
・ 「2019年度秋学期GPCA集計結果」(2020年度第4回教授会資料、2020年7月15日)	
・ 「2020年度春学期GPCA集計結果」(2020年度第8回教授会資料、2020年12月16日)	
③学生の就職・進学状況を学部(学科)単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。	
・ 4年生に対しては進路が決定次第、大学に報告するように指導しており、報告があった学生に限定されるが、実績は把握している。	
・ 学部教授会において、教員がつながりのある企業や担当ゼミの学生から得た情報を提供・共有したり、意見を述べる場が確保されている。	
【 <b>根拠資料</b> 】※ない場合は「特になし」と記入。	
・ 「現4年生および3年生の就職活動状況について」(2020年度第2回教授会資料、2020年5月13日)	
・ 学部ホームページ「人間環境学部のキャリア教育」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/career/shushoku/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/career/shushoku/</a>	
・ キャリアセンターホームページ「学部別就職状況・人間環境学部」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/careercenter/syushoku/gakubu/env/">https://www.hosei.ac.jp/careercenter/syushoku/gakubu/env/</a>	
・ 2021年度人間環境学部パンフレット「先輩たちが進んだ道」 <a href="https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-33&amp;cs=1">https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=3942400-0-33&amp;cs=1</a>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布、進級などの状況を学部(学科)単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。	
・ データの把握主体：教授会執行部および教授会構成員	
・ 把握方法：学務部によるデータ、学部長会議で提示された資料を執行部会議や教授会で共有、意見交換をおこなう。	
・ データの種類：成績優秀者の分布、進級状況など	
【 <b>根拠資料</b> 】※ない場合は「特になし」と記入。	
・ 「2020年度成績優秀者他学部科目履修制度対象者の訂正について」、「『開かれた法政21』奨学・奨励金(成績優秀者奨学金)の選考について」、(2020年度第2回教授会資料、2020年5月13日)	
・ 「入学経路別・男女別卒業生成績表」(2020年度第4回教授会資料、2020年7月15日)	
・ 「2020年度9月卒業秋学期進級判定」(2020年度第5回教授資料、2020年9月16日)	
・ 「2020年度進級・卒業判定」(2020年度第12回教授会資料、2021年2月24日)	
②「学修成果の把握に関する方針(アセスメント・ポリシー)」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>2019年7月に学部の「アセスメント・ポリシー」を定め、公表した。アセスメント・ポリシーでは入学段階、初年次教育段階、2年次以降の教育段階、そして卒業段階の4つの段階に分けてそれぞれ測定の考え方を示した。</p> <p>入学段階では入試における選考を、初年次教育段階では必修科目である「人間環境学への招待」と「基礎演習」を、2年次以降の教育段階では研究会やコース選択、社会との交流・連携に関わる科目（「人間環境セミナー」「フィールドスタディ」「キャリアチャレンジ」）並びにグローバル関連科目を、卒業段階では「研究会修了論文」及び「コース修了論文」を主な指標として、それぞれの成績や3つのポリシーが求める能力の評価を試みた。</p> <p>本学部は文系・理系も含め特定の分野の枠におさまらない学際的なカリキュラムを有しているため、統一的な学習成果測定指標の設定は難しい作業であると考えている。しかし、学習成果の把握や測定の重要性は認識しており、アセスメント・ポリシーに基づく評価の議論・検討を引き続き進めている。</p>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特になし</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学部ホームページ「アセスメント・ポリシー」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/policy/assessment/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/policy/assessment/</a></li> </ul>	
<p>③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1.4②と同じ。</li> <li>ゼミに所属する学生については、担当教員が受講態度やレポート、研究会修了論文等で随時、測定している。2016年度からはゼミに所属していない学生にも任意の教員の指導を受けつつ卒業論文にあたる「コース修了論文」の執筆を可能とする制度を導入し、そのプロセスを通じた学習成果の把握を可能としている。</li> <li>またSAプログラムに参加した学生に関しては、派遣前後の英語外部試験のスコアを比較し、海外語学研修の成果の把握が可能である。</li> <li>学部全体の傾向を把握するために、大学評価室の実施する卒業生アンケートの結果を教授会で確認している。</li> <li>さらに、学部の特色に沿った「学習成果」把握のためのパフォーマンス評価の具体的なツールの開発については、ルーブリックをはじめチェックシート、アンケートなどさまざまな可能性を引き続き検討する。</li> </ul>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特になし</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度人間環境学部『履修の手引き』（web）</li> <li>「2019年度卒業生アンケート調査結果について」（2020年度第5回教授会資料、2020年9月16日）</li> </ul>	
<p>④学習成果を可視化していますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度は、研究会募集の完全オンライン化にともない、研究会ごとの内容を動画などのコンテンツとして学部ホームページで公開することにした。</li> <li>「研究会修了論文」については、研究会ごとに毎年冊子化し、関係者への配布を行っている。また毎年度のタイトルを、学部紀要『人間環境論集』および学部HPで公開している。</li> <li>「フィールドスタディ」に関しては、全コースについてその内容と成果を発表するための「フィールドスタディカタログ」と、教員が課題や対応事例を共有するための「フィールドスタディ報告書」とを作成し、前者については学部ホームページで公開している。</li> <li>「キャリアチャレンジ」に関しても同様に学部HP内で概要と成果を発信している。</li> </ul>	
<p><b>【2020年に変更や改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究会内容に関する動画の作成と公開</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学部ホームページ「ゼミ紹介」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/</a></li> <li>学部ホームページ「研究会修了論文」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/thesis/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/thesis/</a></li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>学部ホームページ『人間環境論集』 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/kiyo/journal/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/kiyo/journal/</a></li> <li>学部ホームページ「フィールドスタディカタログ」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/</a></li> <li>学部ホームページ「キャリアチャレンジ」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/careerchallenge/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/careerchallenge/</a></li> </ul>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S A B
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>教育課程およびその内容、方法の適切性については、主としてカリキュラム・基本制度委員会において、定期的に点検・評価を行っている。また年度ごとに質保証委員会においても点検・評価を行っている。その他各種の学部委員会を組織し、人間環境セミナー企画委員会、フィールドスタディ委員会、SCOPE 運営委員会、RSP 運営委員会などにおいて、それぞれの管掌するカリキュラムの視点から現状を検証し、改善に向けた議論を行うとともに、その提案を可能なものから実行に移している。</p> <p>具体的には、例えば以下のような手法・データを用いて検証を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「フィールドスタディ」および「研究会」については応募状況・参加者数を集計・分析し、適切な科目設置の検討を行っている。</li> <li>「研究会修了論文」および「コース修了論文」の執筆者数・タイトルを把握し、タイトルを学部ホームページ・『人間環境論集』で公開している。</li> <li>1年次必修科目の「人間環境学への招待」において、入学直後（4月）と春学期終了時（7月）で独自の授業アンケートを行い、入試経路別に人間環境学部の学びに対する姿勢などについての分析を実施し、教育内容・方法の改善をすべく検証を行っている。</li> <li>2020年度においてはさらに学生を対象として以下の学部独自のアンケートを実施した。 「自宅におけるパソコンとインターネットの環境調査」（2020年4月9～16日）</li> <li>また、学生モニター制度を活用し、入試経路、学年、留学生や社会人など、学部を構成する学生の多様な属性に応じて学習に関わる意見を聞き、改善に結びつける取り組みを行った。2020年度は学生20名から聞き取りを行った。</li> </ul>	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>学部独自アンケートの実施</li> </ul>	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>「2021年度研究会応募状況」（2020年度第9回教授会資料、2021年1月13日）</li> <li>学部ホームページ「研究会修了論文」 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/thesis/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/thesis/</a></li> <li>「人間環境学への招待・新入生アンケート結果について」（2020年度第3回教授会資料、2020年6月17日）</li> <li>「人間環境学への招待・アンケート結果について」（2020年度第5回教授会資料、2020年9月16日）</li> <li>「学生のオンライン授業に関するアンケート結果と今後の対応」（「危機管理本部（第4～7回）議事録」、2020年度第2回教授会資料、2020年5月13日）</li> <li>「2020年度学生モニターの実施について」（2020年度第9回教授会資料、2021年1月13日）</li> </ul>	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S A B
<p>※利用方法を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業改善アンケート結果の利用は、主に担当教員に委ねられているものの、学部執行部がアンケート結果をチェックし、問題点の洗い出しのためにスクリーニングを行っている。分析結果は学部教授会で共有している。</li> <li>2020年度春学期は、授業改善アンケートに代えて「オンライン授業に対する学生対象調査」の結果を分析し、教授会で共有した。</li> </ul>	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>特になし</li> </ul>	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>「オンライン授業に関する組織的FDについて」（2020年度第7回教授会資料、2020年11月11日）</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

## (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>本学部の教育課程の編成においては、以下の三点が長所・特色と考えている。</p> <p>(1) 「持続可能な発展のための教育」を中核的なミッションとして社会科学を中心とした文理融合の幅広い分野をカバーするカリキュラムを有している。そのなかで学生が自己の関心に即して広い視野を持って学際的に学び、かつ体系的・専門的な学習をおこなうことを可能にするため、「コース制」を導入している。</p> <p>(2) 教室での学術的理論的な授業にとどまらず、社会の現場に出て実践したり、経験を積むことを目指した社会連携科目を積極的に展開している。PBLをはじめとするアクティブラーニング、グローバル教育、キャリア教育の面において充実した教育をおこなっている。</p> <p>(3) 社会人の学び直しやグローバル化といった種々の社会的要請に応えるべく RSP や SCOPE とした各種のプログラムを展開している。さらに高大接続や卒業生との連携にも力を注いでいる。</p>	<p>1.1 ①②③</p> <p>1.1 ⑤⑥</p> <p>1.1 ④</p>

## (3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>学習成果の把握・評価に関して、アセスメント・ポリシーを策定し、測定の物差しを明示することができたが、学部の特色に沿った具体的なさらなる可視化の方策や新たな指標の設定など、今後さらに議論・検討を継続し深めていく必要がある。</p>	<p>1.4 ②③</p> <p>1.5 ①</p>

## 【この基準の大学評価】

人間環境学部の教育は、学際的かつ総合的な持続可能な発展のための教育（ESD）を掲げ、ILAC 科目、専門科目（リテラシー科目）および政策科目で構成されており、そのため学部教育の全体像を把握するには初年次教育が重要である。この点に関して 2020 年度は、新入生への学部での学習を方向付けるため新たに基礎演習におけるプレスクラールーム・ホームカミングデイを開催し、またコロナ禍のため高校生・高校教員向けの SDGs 出張授業をオンライン・オンデマンド方式で 15 回行うという工夫をしている。さらに 2019 年度から開設した社会人学生用のリフレッシュ・ステージ・プログラム (REP) では必修ではないが「人間環境学への招待」「基礎演習」などを選択する学生も多い。これらの点は評価できる。

「グローバル教育推進」は、学部長期構想「人間環境学部 2030」においてもリーディングプロジェクトの一つに挙げられ、グローバル・サステナビリティコースを設置して、学生の国際性を涵養するための教育課程・科目群を置いている。SGU に伴い全学で設置されたグローバルオープン科目も、自由科目の枠内で（卒業所要単位として）受講が可能である。他に①「海外フィールドスタディ」、②SA プログラムがある。①は年間 3、4 コース設置し、学生が国際性を涵養する機会を提供し、海外フィールドスタディ奨励金制度を設け、学生に対する参加費の補助を行っている。②は 2016 年度に新設された短期海外留学機会の提供で、奨学金による補助を行っており、広く学生に参加を呼びかける体制を整え、2017 年度秋学期から実際の派遣を開始している。これらの点で構想の着実な前進がみられる。

2016 年度秋学期から開設された英語学位プログラム Sustainability Co-creation Program (SCOPE) は、本学の SGU の重要な部分を担う事業であり、2021 年度入試から入学定員を 10 名増加し 20 名とし、合わせて 2 種類の入試方式を導入し多様な学生の受け入れを図っている。SCOPE に設置された、「Co-Creative Workshop」において、留学生とともに英語でアクティブラーニングに取り組む機会が提供されており、SCOPE 科目は ESOP 生にも随時受講されており、各種の英語学位プログラムと並んで本大学における SCOPE の存在意義はきわめて大きい。

2020 年度は新規に「Environmental Science」を開講するとともに、卒業論文 (Thesis) の運用を開始し、さらに制度上整備されていた早期卒業制度を利用した卒業生が誕生している。こうしたグローバル教育の体系を示す「グローバルツリー (カリキュラムツリー) の作成は、2019 年度に検討が着手されているが、進展に期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

キャリア教育に関しては、2020年度は学部主催による就活セミナーを11月7日に開催、また卒業生及び就活を終えた4年生が自らの経験を後輩学生に伝えるイベント「自主就活セミナー」を2019年度に続いてオンライン方式で開催(12月12日)するなど新たな試みを実施されている点は評価できる。

教育面での指導に関しては、教員のゼミ紹介動画の作成、ウイズコロナのFSが実施されている。学修成果の把握に関しては、2019年に学部のアセスメント・ポリシーを定め、新たな基準に基づく推進が期待されるが、学際的なカリキュラムという特色をいかしつつどのように学生への教育の効果を定めていくのか、今後の進展を期待したい。

## 2 教員・教員組織

### 【2021年5月時点の点検・評価】

#### (1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部(学科)内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

#### 【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

本学部は人文・社会・自然科学の各分野にわたって多様な専門領域を持つ教員が集まる組織である。教員相互の学際的な「協働」の効果を発揮するためには、ひとりひとりの教員が自分の専門領域において研鑽を積むだけでは十分ではない。教育・研究・社会貢献といった活動の各場面において自分の専門領域とは異なる分野から不断に刺激を受け、資質向上に努める事が必要であり、また学部内にそれを可能にする環境を整備する必要がある。

- ・ カリキュラム・基本制度委員会において、学部内のFD活動に関する検討を行なっている。
- ・ 広報広聴委員会において、各種広報や高大接続の取り組み(とくに「SDGs出張授業」企画)を通して、学部の基本理念である持続可能な社会を多面的に発信する能力を高める機会の創出をはかっている。
- ・ 教員による学部運営体制の改善について検討し、2020年度はより機能的な組織体制としてディーセントワークプロジェクトを試みることにした。
- ・ カリキュラム運営及び学生指導において、研究会募集のWeb化、フィールドスタディ募集のWeb化、履修の手引きのデジタル化などの事務改善を実現し、それを通して教員の能力資源の効果的な集中と分散に取り組んだ。

#### 【2020年度のFD活動の実績(開催日、場所、テーマ、内容(概要)、参加人数等)】※箇条書きで記入。

- ・ 複数教員が担当する授業・企画。「人間環境学への招待」、「人間環境セミナー」、「フィールドスタディ」、人間環境特別セミナー「とにかく考えてみよう」(トニカン)など従来からの取り組みに加え、2020年度はさらに「基礎演習」(ホームカミングデイ)、「Brico\*Radio」などの新しい試みの多くにおいて複数教員が協働して企画・実施をおこなった。その過程で教育・研究について相互に学び合うことで、教員の資質の向上が可能になった。
- ・ 特筆すべきは、東日本大震災をきっかけに複数教員が学生や一般の参加者とともにドキュメンタリー映画を素材としてディスカッションをおこなう「とにかく考えてみよう」(トニカン)である。この企画はすでに10年間にわたって続いており、2020年度はオンライン形式で2回(第18・19回)開催した。

第18回(2020年8月1日)映画『幸せの経済学』に関するディスカッション、参加者10名

第19回(2021年1月9日)映画『蟻地獄のような街』に関するディスカッション、参加者12名

- ・ 2020年度はコロナ禍のもと不足する教員と学生との間の接点を増やすため、オンライン・オープンスペースとして「Brico\*Radio」を開催した。ラジオのトークセッションを模したZoomセッションで、秋学期(9-12月)に合計11回にわたり、週1回月曜日の8時から毎回テーマを決めて教員と学生が対話をおこなった。音声は録音し、事後聴も可能なようにGoogleクラスルームでデータを配布したほか、読書案内などの情報提供も積極的におこなわれた。

Brico\*Radio各回のテーマ(一部):「学生と教員の本音トーク【オンライン授業編】」、「ゼミ解体新書」、「キャリアの悩みを語るタベ〜女性がはたらくということ」、「今の学生が考える『しごと』『わたし』『未来』」、「人環に入ってから変わったこと」、「今年のふりかえり」

- ・ 教員を対象とする各種アンケートの実施も、2020年度には活発におこなわれた。アンケート結果を集約し教授会で共有することで、教員同士が授業方法や工夫、問題点を報告し合うことが可能となった。この方法は多くの情報を簡便に手に入れることができ、FDとしてはたとえば個別の授業参観よりもはるかに有益であった。実施したアンケートは以下の通りである。

「『オンライン授業』の講義方法に関するアンケート」

「春学期のふりかえりアンケート」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>「ホームカミングデイ中間報告」 「With コロナの教育活動に関するアンケート 2020」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>さらに 2020 年度には教員を対象としたオンラインやハイフレックス授業の技術サポート講習会を開催した。前者は春学期に 3 回（4 月 29 日、6 月 17 日、6 月 24 日）、秋学期に 2 回（9 月 7 日、11 日）の計 5 回、後者は 2021 年 3 月（19 日、27 日、31 日）に計 3 回開催した。</li> <li>教員を対象とする授業の様々な問題を解決するためのオンラインサポートデスクを設置した。</li> <li>シラバス第三者チェックも以前から FD の一環として機能している。</li> </ul>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「トニカン」の開催</li> <li>「Brico*Radio」の開催</li> <li>教員アンケートの実施</li> <li>オンラインサポートデスクの設置</li> </ul>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学部ホームページ「東日本大震災と人間環境学部 2020 年度」（トニカン） <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/torikumi/shinsai/2020/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/torikumi/shinsai/2020/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54</a></li> <li>「Brico*Radio」募集チラシ <a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/3716/0133/7674/BricoRadioMagazine_Web.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/3716/0133/7674/BricoRadioMagazine_Web.pdf</a></li> <li>「『オンライン授業』の講義方法に関するアンケート」（2020 年度第 1 回教授会資料、2020 年 4 月 15 日）</li> <li>「2020 年度人間環境学部春学期授業ふりかえりアンケート報告」（2020 年度第 5 回教授会資料、2020 年 9 月 16 日）</li> <li>「ホームカミングデイ中間報告について」（2020 年度第 8 回教授会資料、2020 年 12 月 16 日）</li> <li>「With コロナの教育活動に関わるアンケート実施について」（2020 年度第 12 回教授会資料、2021 年 2 月 17 日）</li> <li>「授業方法相談オフィスアワー開催のお知らせ」（「法政大学人間環境学部専任・兼任教師の皆さまへ」、2020 年度第 2 回教授会資料、2020 年 5 月 13 日）</li> <li>Web 掲示板「人間環境オンライン授業サポートデスク」 <a href="https://9226.teacup.com/jksupport/bbs">https://9226.teacup.com/jksupport/bbs</a></li> </ul>	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S    A    B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「人間環境学会」（教員・学生が会員）の会誌『人間環境論集』に教員の研究成果を発表するほか、教員の教育・研究／社会貢献活動を掲載している。</li> <li>「人間環境学会」では、教員の著書や論文の刊行・学会発表を対象とする助成金制度を設置している。</li> <li>2020 年度には学部教員が共同で『フィールドから考える地域環境』（第 2 版）を執筆し、刊行した。</li> <li>教員有志による「持続性学研究会」の開催（2019 から 20 年度に計 3 回実施）</li> <li>千代田区との事業協力協定に基づく「千代田エコシステム」（CES）ゼミの活動。2019 年度には専門の異なる 3 名の教員が合同してひとつのゼミを実施したが、2020 年度は 3 名が 1 つずつ合計 3 つのゼミを開催した。</li> <li>人間環境特別セミナー「とにかく考えてみよう」（2011 から 20 年度までに計 19 回実施）も、一般の参加者にも開放された企画として社会貢献の機能を果たしていたが、2020 年度はオンライン開催のため学部内限定の催しとして 2 回実施した。</li> <li>「SDGs 出張授業」企画の実施。本企画は単なる学部の自己紹介や広報の内容ではなく、学部の教育資源を活用した「高大接続教育 FSR」という性格を持っている。2019 年度から開始したが、2020 年度はオンラインにより計 15 回開催した。</li> </ul>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『フィールドから考える地域環境』（第 2 版）の刊行</li> </ul>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020 年度人間環境学部『シラバス』（web）</li> <li>学部ホームページ『人間環境論集』 <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/kiyo/journal/">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/kiyo/journal/</a></li> <li>ミネルヴァ書房ホームページ『フィールドから考える地域環境』（第 2 版） <a href="https://www.minervashobo.co.jp/book/b548723.html">https://www.minervashobo.co.jp/book/b548723.html</a></li> </ul>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>学部ホームページ「東日本大震災と人間環境学部 2020 年度」(トニカン) <a href="https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/torikumi/shinsai/2020/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54">https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/torikumi/shinsai/2020/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54</a></li> <li>「2020 年度広報活動の実施状況」(2020 年度第 12 回教授会資料、2021 年 2 月 17 日)</li> </ul>
③組織編制やFD等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。
※取り組みの概要を記入
<ul style="list-style-type: none"> <li>学部「危機管理本部」の立ち上げと活動、とくに学部 BCP (事業継続計画) の策定と必要な規定改訂。</li> <li>学部独自の学期ごとの授業ガイドライン、課外活動(ゼミ合宿、フィールドスタディ)ガイドライン、さらに特別入試ガイドラインの策定。</li> <li>教員を対象とするオンライン授業実施のためのオンライン講習会の開催(春学期・秋学期で5回)</li> <li>教員のオンライン・コミュニティのツールとしてWeb 掲示板「人間環境オンライン授業サポートデスク」を設置。</li> <li>「基礎演習」と「研究会」での「ホームカミングデイ」実施中および実施後の教員アンケートと結果共有。</li> <li>ハイフレックス授業のための技術サポート講習会の開催(2020年3月19日、27日、31日実施)。</li> </ul>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入
<ul style="list-style-type: none"> <li>「人間環境学部危機管理本部報告」(2020 年度第 1~9 回教授会議事録)</li> <li>Web 掲示板「人間環境オンライン授業サポートデスク」 <a href="https://9226.teacup.com/jksupport/bbs">https://9226.teacup.com/jksupport/bbs</a></li> <li>「ホームカミングデイ中間報告について」(2020 年度第 8 回教授会資料、2020 年 12 月 16 日)</li> </ul>

## (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>同じ専門分野の教員は2人といないという学部の学際的な構成は、多様な運営組織とカリキュラム展開を可能としており、学部内のみならず大学内外の機関や組織とのさまざまな「協働」の実践として実を結んできた。さらに学生を多様な入試経路から受け入れており、そのニーズに学部スタッフが一致団結して応答してきたことも、本学部の大きな特色であり、それはコロナ下の 2020 年度においても遺憾なく発揮された。</p>	2.1 ①②③ 3.1 ①

## (3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画(既の実施している場合にはその進捗状況も含めて)をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>本学部の特色である多岐にわたるカリキュラムを運営し、様々なニーズに対応していくための業務は膨大にして極めて煩雑である。教員は研究と教育以外にもさまざまな事務や割かなければならない調整/事務量も多い。今年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症への対応をおこないつつ、学部本来の教育と研究を進めていくという大きな問題を抱えている。そのなかで、作業の効率化をはかるだけでなく「負担の公平化」については平常時以上の工夫が必要である。これをどう実現していくかが課題と言える。</p> <p>また、学部の特色である学際性と協働の強みをさらに活かし、学部の目指す「持続可能な発展」のための研究成果や教育モデルをより強く社会に発信していく必要がある。すでに新たな取り組みとして「SDGs 出張授業」企画や叢書の刊行をおこなっているが、今後はこれらをさらに発展させて、教員同士の意識共有や相互学習を繰り返しつつ、高大接続や社会連携・社会貢献を実行していくことを追求したい。</p>	2.1 ①②③ 3.1 ①

## 【この基準の大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

人間環境学部では、FD活動の一環でもある複数教員が担当する授業・企画として「人間環境学への招待」、「人間環境セミナー」、「フィールドスタディ」、人間環境特別セミナー「とにかく考えてみよう」（トニカン）など従来からの取り組みに加え、2020年度はさらに「基礎演習」（ホームカミングデイ）、「Brico\*Radio」（ラジオのトークセッションを模したZoomセッションで、秋学期（9-12月）に合計11回にわたり、週1回月曜日の8時から毎回テーマを決めて教員と学生が対話）などの新しい試みが行われている。複数教員が協働して企画・実施をおこなう過程で、教育・研究について相互に学び合い、教員の資質の向上が可能になった。さらに教員を対象とする各種アンケートの実施も、2020年度には活発におこなわれた。加えて、2020年度には教員を対象としたオンラインやハイフレックス授業の技術サポート講習会を開催し、また教員を対象とする授業の様々な問題を解決するためのオンラインサポートデスクを設置するなど、FD活動は多岐にわたり工夫され実施されていることは評価できる。これらの活動の成果が検証されることを期待したい。

社会貢献として、千代田区との事業協力協定に基づく「千代田エコシステム」（CES）ゼミの活動も、2020年度は3名が1つつ合計3つのゼミを開催しており、その成果の公表も期待される。

### 3 その他の基準のCOVID-19への対応

#### 【2021年5月時点の点検・評価】

##### (1) 点検・評価項目における現状

3.1 その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献におけるCOVID-19対応・対策を行っているか。

①その他、学部として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等におけるCOVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

##### ※取り組みの概要を記入

- ・ 学部から学生へのメッセージ発信を随時おこなった。
- ・ 自宅での通信環境に関するアンケートを実施。
- ・ 学生のおこなう各種手続きのオンライン化・
- ・ ペーパーレス化の推進。とくにゼミ募集やFS参加者募集を完全にオンライン化した。
- ・ 年度初めの学年ガイダンスのオンデマンド動画作成・配信
- ・ 模擬授業・教員自己紹介・ゼミ紹介などの動画やコンテンツの作成・公開（学部HP）
- ・ RSP生および転編入学生に対する単位認定のリモート化。これまでの個別面談に代えて、履修・学習に関する指導内容をひとりひとりに文書化して発送。
- ・ 1年生に特化した対応として、「基礎演習」における「プレクラスルーム」および「ホームカミングデイ」の実施。「ホームカミングデイ」は「研究会A」でも実施した。
- ・ 「Brico\*Radio」の実施。学生と教員間のコミュニケーションの拡大・充実を図るためのラジオ番組形式のオンラインミーティングとして秋学期に合計11回開催し、教員と学生が集まって特定のテーマについて対話をおこなった。
- ・ 人間環境特別セミナー「とにかく考えてみよう」のオンライン実施（2回）。
- ・ 社会連携科目「フィールドスタディ」・「キャリアチャレンジ」を「ウィズ・コロナのFS/CC」として実施。
- ・ 教員の教育研究の環境整備としては、教員を対象としたオンライン授業の講習会（授業方法相談オフィスアワー）と、ハイフレックス技術サポート講習会を計8回開催した。さらに授業の様々な問題を解決するためのオンラインサポートデスクを設置した。
- ・ 社会貢献としては、高大連携のための「SDGs出張授業」企画をオンラインで実施した（2020年度中にのべ15回実施）。

##### 【根拠資料】

- ・ 「学部生向け一斉送信メール内容」（2020年度第1回教授会資料、2020年4月15日）
- ・ 「7月教授会以後 教員・学生への連絡事項等メモ」（2020年度第5回教授会資料、2020年9月16日）
- ・ 「学生のオンライン授業に関するアンケート結果と今後の対応」（「危機管理本部（第4～7回）議事録」、2020年度第2回教授会資料、2020年5月13日）
- ・ 学部ホームページ「2021年度研究会募集について」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/2021bosyu/>
- ・ 学部ホームページ「ゼミ紹介」  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/seminar/>
- ・ 「基礎演習プレクラスルームによる1年生ケアについて」（2020年度第3回教授会資料、2020年6月17日）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 「学部生の登校機会（仮称「ホームカミングデイ」）企画について」（2020年度第5回教授会資料、2020年9月16日）
- 学部ホームページ「東日本大震災と人間環境学部2020年度」（トニカン）  
<https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shokai/torikumi/shinsai/2020/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54>
- 「Brico\*Radio」募集チラシ  
[https://www.hosei.ac.jp/application/files/3716/0133/7674/BricoRadioMagazine\\_Web.pdf](https://www.hosei.ac.jp/application/files/3716/0133/7674/BricoRadioMagazine_Web.pdf)
- 学部ホームページ「2020年度フィールドスタディ募集について（ウィズ・コロナのFS）」  
[https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020\\_FSBoshu/](https://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/naiyou/program/f-study/2020_FSBoshu/)
- 「授業方法相談オフィスアワー開催のお知らせ」（「法政大学人間環境学部専任・兼任教師の皆さまへ」、2020年度第2回教授会資料、2020年5月13日）
- Web掲示板「人間環境オンライン授業サポートデスク」  
<https://9226.teacup.com/jksupport/bbs>
- 「2020年度広報活動の実施状況」（2020年度第12回教授会資料、2021年2月17日）

## 【この基準の大学評価】

人間環境学部においては、教育面での新型コロナ対策は多方面で工夫されていると評価できる。新入生や留学生への履修指導に関しては、ラーニングサポーター制度を活用し、また留学生どうしのピアサポートを充実させるなど、種々の取り組みがなされている点は特筆される。

## III 2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
1	中期目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する。	
	年度目標	学部ホームページに掲載された理念・目的の修正の要の有無を検討する。	
	達成指標	教授会議事録、学部HP	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	特に修正の要はなく、コロナ禍が契機となって生じた、持続可能な社会に向けての「ニューノーマル」へのシフトの潮流に、学部の理念・目的がにまさに適っていることを確認できた。
		改善策	—
		質保証委員会による点検・評価	
所見		執行部自己評価の通りで問題ないと判断される。	
改善のための提言	—		
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	適正なPDCAサイクルの運営を継続する。	
	年度目標	新型コロナウイルス感染症対応が長期化することを想定し、平時の「戦略構想委員会」を土台に、学部内に執行部機能を強化した中枢として「危機管理本部」を設け、学部のBCPを策定する。そして、教職員のいのち・健康を守ることを第一に、昨年引き続き執行部・学部事務局や特定教員への過負荷を軽減する業務分担のあり方を考える。	
	達成指標	▶学部危機管理本部議事録 ▶「ディーセントワーク・プロジェクト」の関連タスクフォース協議記録 ▶2021年度各種委員会委員表	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
	理由	「危機管理本部」は狙い通りに有効に機能し、執行部の過負担を軽減するとともに、学部の教職員・学部生に配慮した安全対策を実施することが出来た。さらに、ここで審議された施	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			策は学部長を通じて学部長会議でも随時提言され、それが大学のコロナ対応方針に幾つか反映されるなど、大きな成果を上げることが出来たと自己評価できる。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	執行部自己評価の通りで問題ないと判断される。なお、学部独自の危機管理の態勢として「危機管理本部」を21年度も継続するのか、それともまた別個の態勢をとるか、新旧執行部で相談してしっかりと方針を決める必要がある。	
		改善のための提言	ディーセントワークプロジェクトは、コロナ禍によりごく一部のタスクフォースの活動に留まったことは仕方ないが、当然、中期的な継続課題として可能な範囲で取り組んでいくべきである。	
No		評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3		中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。	
		年度目標	未曾有の非常時こそ本学部の特色を発揮できる好機と捉え、本学部ならではの話題(例:「災害」への対応、ライフスタイル・価値観の見直し、社会の根本的な変革の可能性など)をオンライン授業に採り入れることに、可能な範囲でとりくみ、学部の教育のポテンシャルを再認識する機会とする。	
		達成指標	▶教員個々のオンライン授業実施記録(年度末、ゼミや講義科目において試行した工夫と、「成果」の感触(定性的把握))	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	コロナ禍で顕在化した「持続可能な社会」構築の課題の切実な再認識、ニューノーマルの希求という潮流をトピックとして取り上げることが、各専門科目で教員の専門分野に即して行うことができた。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	今年度の各教員のコロナ対応のプラクティスを集成した資料を、経験値として共有し、次年度の年度目標に当然反映すべきである。	
			改善のための提言	—
No		評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4		中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。	
		年度目標	・新型コロナウイルス対応の「オンライン授業」について、兼任講師も含めた各教員の情報交換・質疑応答のプラットフォームをweb掲示板として設けつつ、各教員の得意分野を生かした互助による実験的などりくみを共有し、「ワンチーム」で難局に挑んでいくことを、組織的なFD活動とする。 ・特に初年次教育で重要な2つの必修科目「人間環境学への招待」「基礎演習」については、昨年度に合意されている方針を、可能な範囲で実行する。すなわち前者は新たな運営方式、後者は汎用的な共通性の改善など、全員参加の意識で充実に向けてとりくみ、組織的なFD活動に位置付ける。	
		達成指標	▶Web掲示板「人環オンライン授業サポートデスク」の投稿記録 ▶「人間環境学への招待」の各回記録、「基礎演習」の統一的な内容に関する合意記録	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	▶初めてのオンライン授業については、教員個々のとりくみに留まらず、左記の通り、学部で独自の「オンライン授業サポートデスク」を設け、主として兼任教員の質問に答えてサポートしたほか、Zoomによる講習会も実施した。大学の方針に準拠して、学部独自のオンラ	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		<p>イン授業方針も、教員にアンケートを行なった結果のフィードバックも含めて、きめ細かく年数回策定して周知した。この学部オンライン授業方針は、特に1年生春学期必修の「人間環境学への招待」と1年生秋学期必修クラス授業の「基礎演習」において、重点的に実施された。</p> <p>▶一方、学生向けに「お問い合わせフォーム」も作り、学生がオンライン授業の困りごと等について気軽に相談できる窓口として有効であった。そして春学期の学生の声を秋学期のオンライン授業改善に活かし、その成果は学生モニターの聴き取りで確認できた。</p>
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	21年度のオンライン授業については、前年度以上の質の向上が求められ、初めてだからという言い訳が通用しないことを改めて認識し、各教員が精進せねばならない。
	改善のための提言	個々の努力に加えて、例えば「ハイフレックス授業」について、サポート体制を作ることなどの助け合いは今年度と同様、不可欠である。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	文理融合でありかつ特定の分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。
	年度目標	昨年度に「アセスメントポリシー」を策定したが、今年度は、新型コロナウイルス感染症対応のオンライン授業の試行でどのような「成果」が得られるのかを検証することに、目標を絞りたい。
	達成指標	▶教員個々のオンライン授業実施記録（年度末、ゼミや講義科目において試行した工夫と、「成果」の感触（定性的把握）
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	中期的な課題として、各教員が意識してとりこんでおり、まだ具体的な指標の集約には至っていないが、継続的な課題であることは各教員に共有されている。
	改善策	—
年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
	所見	「with コロナの教育活動」を、中期的かつ重要な課題に向き合う好機ととらえて、「成果」に関するとりくみを可能な範囲で少しずつ前進させることが望まれる。
	改善のための提言	—
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	2016年度に策定した入試戦略に基づき、18歳人口の減少を迎える2018年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。
	年度目標	①一般入試では、隔年で増減を繰り返すにA方式志願者数の波について、減少年に当たった20年度（2128名）に対して、21年度は微増を目標とする。 ②多様な入学経路を本学部の特色として大切に、新型コロナ対応による制約を予測しつつ、各経路の志願者の確保に善処する。特に「自己推薦入試」では、特色ある入試経路としての意義を維持すべく、今年度に可能な選抜方法について検討する。
	達成指標	▶2021年度入試結果一覧表 ▶教授会議事録（特別入試関連の議案）
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
年度末報告	理由	▶特別入試は各経路で順調に結果が出ているといえる。特に自己推薦入試は、コロナ禍による推薦入試志向の影響もあると思われるが、前年比140%の志願者増となった。社会人RSPも順調である。 ▶一般入試は、A方式で前年比約87%の志願者数となったが、コロナ禍による減少率は当初の予想よりは大きくなく、次年度に回復可能な下げ幅であると思われる。
	改善策	—

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価		
	所見	<p>▶一般入試 A 方式は、まず志願者 2000 人以上への回復が目標となるだろう。</p> <p>▶自己推薦は、コロナ禍が収束した状況において志願者数がどうなるかを見守る必要がある。</p> <p>▶RSP「編入」枠の確保は、大学の財務状況改善にも貢献する施策にもなるので、アドミッションポリシー中の重点の一つであるという認識を改めて共有すべきである。</p>		
	改善のための提言	-		
No	評価基準	教員・教員組織		
7	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的な FD 活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。		
	年度目標	2021 年度着任枠 2 名の専任人事については、新型コロナウイルス感染症対応として、採用活動・着任時期の 1 年延期等の見直しを行う。		
	達成指標	教授会議事録		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	当初の計画通りで、21 年着任 2 名の専任人事は、22 年着任として 21 年度に人事を行うことになった。	
		改善策	-	
質保証委員会による点検・評価				
所見	予想外の欠員が専任、SCOPE 任期付で生じたため、21 年度に実施する採用人事は、限られたマンパワーで無理なく出来る範囲の計画が不可欠である。			
改善のための提言	-			
No	評価基準	学生支援		
8	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。		
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学の学生アシスタントやラーニングサポーター制度を利用して、オンラインによるピアサポート導入を試みる。</li> <li>新型コロナウイルスによる閉塞状況への対応として、学生の「心の支援・救済」も重視し、学部 HP における励ましの発信や教員個々の授業（学習支援システム）を通じた可能な範囲のコミュニケーションに注力する。</li> </ul>		
	達成指標	<p>▶学生アシスタント、ラーニングサポーター実施記録</p> <p>▶学部 HP「学生の皆さんへ」の発信記録</p>		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	<p>▶学部 HP にいち早く、学生のための「お問合せフォーム」を設置し、講義や学生生活についての質問に対応することができた。</p> <p>▶新入生対応の教育支援として基礎演習担当教員による「プレクラスルーム」を実施した。そこに学生アシスタントとして上級生の参加もあり、オンラインによるピアサポートが実現した。</p> <p>▶秋学期には「ホームカミングデー」と称して、学生の交流、心のケアを重視し、基礎演習、研究会単位での登校機会を設けた。ラーニングサポーター制度を活用した上級生の参加によって、ピアサポートも実現した。</p>	
		改善策	-	
質保証委員会による点検・評価				
所見	「人間環境学への招待」「基礎演習」といった 1 年全員必修授業やゼミについては、with コロナのケアが行き届いたと評価できるが、2 年生以上のゼミ所属の学生に対するケアをどうするか、コロナ感染状況が続く場合に適度に「対面授業」による登校機会があるか等、とりにくみが必要である。			

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		改善のための提言	左記の通り、ゼミ未所属者へのケアは、重点課題の一つになるだろう。
No	評価基準		社会連携・社会貢献
	中期目標		学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任（FSR）を果たす。
	年度目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度に着手し、「高大接続教育」への協力という点で、学部の特色を活かした社会貢献企画として好感触を得ていたSDGs少額広報事業は、新型コロナウイルス感染症対応で大幅な制約を受けざるを得ないが、HPによる発信や、一部オンライン模擬授業の企画など、可能な範囲で継続したい。</li> <li>・東日本大震災直後に、教員有志のとりくみで始まった通称「トニカン（とにかく考えてみよう）」企画が、以後「人間環境学会」の社会連携活動として定着し、現在に至っている実績をふまえ、同様の未曾有の危機に直面して、学部としてどのような社会連携の発信ができるか、人間環境学会による新たな企画を試みる。</li> </ul>
	達成指標		<ul style="list-style-type: none"> <li>▶HPにおける広報関連の発信記録</li> <li>▶「オンライン模擬授業」の試行記録</li> <li>▶人間環境学会の特別企画記録</li> </ul>
9		教授会執行部による点検・評価	
	自己評価		S
年度末報告	理由		<ul style="list-style-type: none"> <li>▶コロナ禍で対面の「出張講義」やオープンキャンパスが中止を余儀なくされたなかで、オンラインによる「出張講義」、とりわけSDGsをテーマとした「連続講義」の試みは大きな成果を収め、次年度以降も需要が期待できる収穫となった。SDGsをクローズアップした学部の「高大接続教育」のとりくみは、社会貢献のポテンシャルが豊かであることを確認できた。</li> <li>▶2011年の「3・11」を契機に始まった「トニカン」企画は、今年度、コロナ禍という、東日本大震災に匹敵する未曾有の危機状況に合ったテーマを選んで、二度開催された。</li> </ul>
	改善策		—
		質保証委員会による点検・評価	
	所見		執行部自己評価の通りで問題ないと判断される。
	改善のための提言		—
<p><b>【重点目標】</b>          新型コロナウイルス感染症対応のとりくみに尽きる。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b>          執行部機能を拡大した学部内「危機管理本部」を中枢として、教職員一体のチームワークで、適切な役割分担と情報共有に努めつつ、上記各項目に記した施策を試みる。</p> <p><b>【年度目標達成状況総括】</b>          学部の「危機管理本部」は上記の通り所期の成果を収め、新型コロナ対応については、何とか無事に乗り切ることができた。20年度秋学期後半から、正規授業の一部対面開講は控える代わりに、土曜日に基礎演習（1年生）・ゼミ（2年生以上）を対象に「ホームカミングディ」と称する参加任意の登校機会を設け、（感染状況が悪化しなければ）対象となる学生が最低3回は登校できるようローテーションを組んで実施し、好評であった。21年度は、大学の基本方針に沿って、レベル1の場合に積極的に対面授業を開く計画を策定し、学部生に十分な登校・対面授業の機会を提供できる見込である。          なお、上記の各項目の中では「内部質保証」に相当すると考えられる成果の一つに、「教・職協働」（学部職員の、単なる事務役を超えた、学部のとりくみへの参画）の進展の実感があげられる。その実践をもとに学部事務主任が執筆した政策構想文書は、成果として特筆すべき労作である。</p>			

### 【2020年度目標の達成状況に関する大学評価】

人間環境学部では、学部長期構想に記された理念・目的に基づき明確な方向性が示されている。内部質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携は、すべて年度目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。学部HPにいち早く学生のための「お問い合わせフォーム」を設置したり、新入生対応のための「プレクラ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

スルーム」の実施、また秋学期には「ホームカミングデイ」を設けたことは、コロナ禍の学生支援において優れた取り組みである。またディーセントワークプロジェクトに関するタスクフォースを機動的に活用すること等によって、長期構想の2021年度のいっそうの進展が望まれる。さらに「各教員のコロナ対応のプラクティスを集成した資料を、経験値として共有し、次年度の年度目標に当然反映すべき」と質保証委員会の所見にあるが、その実現は今後のオンラインワークの定着を見越した場合、有益な資料となり得ると思われるので期待したい。

## IV 2021年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	学部長期構想に記載した理念・目的を確認する。
	年度目標	○コロナ禍を踏まえた／コロナ後も見据えた学部構想と具体的な戦略目標の見直しについて検討する。学部ホームページに記載された理念・目的・コース制の説明についての文章を再検討し、必要であれば修正する。
	達成指標	○カリキュラム・基本制度委員会、戦略構想推進委員会の適時適切な開催 ○学部長構想文書の改定と公表(必要に応じて) (教授会議事録、各種会議議事録、学部HP)
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	適正なPDCAサイクルの運営を継続する。
	年度目標	○自己点検委員会を通じた内部質保証の運用を継続する ○昨年度同様BCPに基づいた適切な学部運営を進め、特定の教員の過度な負担を避ける体制／業務方法作りの工夫を検討／実施する。
	達成指標	○自己点検委員会の適時適切な開催(議事録) ○「ディーセントワークプロジェクト」など各種会議での決定事項(各種会議議事録)
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学部長期構想に記されたコアミッションに基づき、持続可能な社会の構築に貢献するための教育を実践する。また、同じく長期構想にて再定義された教育におけるミッションを踏まえ教育内容のさらなる改善をすすめる。
	年度目標	○教育内容については、昨年度同様コロナ禍／コロナ後を想定すると、本学部の標榜する「持続可能な社会」のための教育内容がこれまで以上に重要になってくることが考えられる。特に分野の異なる複数教員の協働の機会の拡充を一つの方向性として。 ○社会連携科目については、今年度も自由に現地に行けない状況が想定される中(一方でオンラインという新しい可能性もひらけた今)、コロナ後も想定し授業効果をあげられる教育内容／方法について検討する。
	達成指標	○複数教員協働の機会実現(招待、セミナー、その他イベント等) ○社会連携科目に関する各種委員会等での議論とその結果の実施状況 (各種会議議事録、イベント記録など)
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	持続可能な社会の構築に向けた「実践知」の修得のため、多様な主体と協働しつつ、主体性をもって学ぶ姿勢を強化する教育を推進する。
	年度目標	○オンライン授業の特質を活かした外部との連携など、教員側の工夫と、学部内でのFD機会の利用を通じた支援を組み合わせ、授業実施方法の質の向上やトラブルの減少において昨年度の努力に上積みができるよう努める。
	達成指標	○学期末アンケートなどを通じたグッドプラクティス、トラブル事例の集積と共有 ○各種委員会等での議論とその結果の実施状況 (各種会議議事録)
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	文理融合であり、かつ特定の分野の枠に収まらない教育課程に対し、いかなる学習成果の把握、可視化の手法があるのか、グッドプラクティスを積み上げつつ体系化を目指す。
	年度目標	学部の学際性に鑑み、科目のそれぞれの特色に応じて学習成果を測定できるような指標・基準やツールの考案に努める。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	達成指標	○各種委員会等での議論とその結果の実施状況(特にカリキュラム・基本制度委員会議事録) ○具体的な成果把握の方法や工夫の検討記録/実施事例
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	2016年度に策定した入試戦略に基づき、18歳人口の減少を迎える2018年以降の社会環境において、定員超過に留意しつつ定員の充足に努める。
	年度目標	○2021年度入試に比べ入学辞退者数を減少できるよう、学部の魅力をさらに発信する広報・社会連携活動を通じて、定員充足に努める。 ○SCOPEについては定員増を受けてより定員確保に留意する。
	達成指標	○定員充足率、辞退者数(2022年度入試結果一覧) ○広報活動実績(学部HP、広報・社会連携委員会議事録) ○SCOPE志願者数、入試実績
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	学部長期構想および人事戦略に基づき、適切な教員組織の維持を図る。また、持続的なFD活動を実施し、イノベーションの基盤の整備に努める。
	年度目標	○2021年度中に、専任教員2名、SCOPE特任教員1名の採用をおこなう。その際、全体の人員バランスも考量した適切な採用に努める ○授業オンライン化などを踏まえたFD活動は昨年度同様に継続する。 ○教員の負担の軽減/公平化に引き続き努める。
	達成指標	○採用枠充足状況 ○FD活動実績 ○「ディーセントワークプロジェクト」など各種会議での決定事項(各種会議議事録)
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	多様な学生のニーズを念頭におき、学習支援、生活支援を組織的に実施する。
	年度目標	○学習指導委員会を積極的に活用し、予防的な学生指導をおこなう。 ○RSP学生の学習環境を改善するため、新たな単位認定制度を導入する。 ○RSP学生のピアサポート制度を創設する。 ○SCOPE学生のピアサポート制度を創設する。
	達成指標	学習指導委員会活動報告 教授会議事録 ラーニングサポーターの活動記録
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	学部長期構想に記された通り、「社会に開かれた学部」として社会貢献・社会連携をすすめ、学部の社会的責任(FSR)を果たす。
	年度目標	○学部ホームページの充実。とくに授業内容や教員の紹介に関する動画コンテンツを増加させる。 ○「SDGs出張授業」企画をはじめとする高大連携教育をさらに展開する。 ○各種学部団体との協定の見直し、拡充などを通じ社会連携科目の充実を目指す。 ○学部教員の研究活動や学部の学びについて、オンラインの持つ可能性を活かした社会貢献のあり方を念頭におきつつ、さらに発信能力を強化する。
	達成指標	学部HP 広報活動実績 教授会議事録など各種会議議事録 その他社会連携イベント開催実績
<p><b>【重点目標】</b> 学部教育の柱の一つである社会連携科目などについては自由に現地にいけない状況が想定される中(一方でオンラインという新しい可能性もひらけた今)、コロナ後も想定し授業効果をあげられる教育内容/方法について検討する。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 感染症予防のため課せられた制約を乗り越えて、各科目の教育内容を見直し、学部教育課程の新しいスタイルを模索する。とくに、①「フィールドスタディ」、「キャリアチャレンジ」など社会連携科目と、②初年次教育科目(「人間環境学へ</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

の招待」、「基礎演習」)、のそれぞれにおいて、ウィズ・コロナそしてポスト・コロナ時代の新しいスタンダードをつくり出す。そのために関連する委員会でも議論を重ねつつ、可能な範囲から試行的取り組みを実施する。

#### 【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

人間環境学部では、2021 年度の中期目標・年度目標では、学部長期構想を踏まえた上で、コロナ禍を踏まえた／コロナ後も見据えた学部構想と具体的な戦略目標の見直しについて検討するとされている。また、その他の項目も、学部特性からコロナ禍を学問的に捉えると同時に、また教育面での対策としても検討していくという姿勢が明確であり、これらの点を評価したい。並行して、ディーセントワーク・プロジェクトの推進も、働き方の見直しは SDGs の実現にも繋がるものであり適切である。重点目標である社会連携科目の実施の可能性の模索も、学部の教育の根幹に関わるという意味で着実に継続されることを期待する。

#### 【大学評価総評】

人間環境学部においては、2020 年度は新型コロナウイルスの影響を特に教育面で受けたため、対面で実施されてきた実習系の教育、および国際的な活動に関して制約を受けた年であった。その一方で学部長期構想「人間環境学部 2030～For Our Sustainable Future～」の観点からしても、今後の国際社会や日本にとって今後起こりうる同様の危機に社会の全体がどう対応するかは、持続可能な社会にとって検討が必要な新たな課題を突き付けたともいえる。人間環境学部が、学際的な教育体系の拡大、高大接続教育貢献の試みとしての SDGs 出張授業のオンライン・オンデマンド化による続行などの工夫によって、新たな方面からの改善策を進める可能性を見出せたという点は、前向きな対応として評価できる。また FD 活動に関しても協働の教育を通じて、また教員アンケートなどを通じて情報の共有に基づき改善に努めている実践状況も評価できる。コロナ禍においても「協働」は発揮され、一致団結して学生対応に取り組まれてきたことは評価できる。

今後は、新入生を含む学生の意見や要望を学部運営に生かす際にも、オンラインや学生コミュニティをいっそう活用する可能性を検討されることを期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。